

太陽ガン 熱血野外調教 あかねちゃん



さんかく同盟



我々はお好み焼き屋 “あかね”の常連客だ。

この看板娘・日野あかねちゃんとは、気安く話せる仲である。

ある日、駄目もとで彼女をSMプレイに誘ってみると、

意外にもすんなり合意してくれた。実は性行為に興味があったようだ・・

さっそく休日に、人気がない穴場のキャンプ場におでかけすることにした。

あそこなら邪魔されずに、思う存分野外調教ができるはずだ・・・・



次の日曜日。いろいろ道具をつめこんだキャンパーであかねちゃんを
迎えにいき、キャンプ場にむけて出発する。

車の中で会話しながら、まずはあかねちゃんの服を脱がし、後ろ手に

縛りあげた。話を聞くと、処女ではないそうだが緊縛は初めてとのこと。

忘れられない体験にしてやろう・・



「さあ、ここからは歩きだよ、車をおりて・・・」

「えっ・・・は、ムダカでお外を歩くん？」

「そうだよ、さ、その坂道をのぼって・・・」

「僕らの前を歩くんだ。」

あかねちゃんの縄尻をとって、前を歩かせる。

囚人を連行しているような雰囲気だ。

調教気分を盛り上げていった。

「太陽の光がまぶしいねえ。

きれいなおっぱいやお尻が、

よく見えるよ。」

「ひゃー！、は、はすかしいねん。

おまたがすーすーする・・・」

「こんな初めてや・・・」

「おっ、あかねちゃん、おツユが垂れてきたよっ・・・」

「えっ！・・・こ、こらっ！」

「下からみんなや！ おめ〇見えるやんか・・・」

指摘されて改めて恥ずかしくなったのか、

あかねちゃんは縛られた体をひねり、

なんとかアソコを隠そうとして

足が止まってしまった。

ピシヤン！

「ひゃあんっ！」

お尻をかるく叩き、

歩みを促す。

「ざあ、立ち止まらないで、あかねちゃん。

大丈夫！。キラキラ光って綺麗だよ！」

「あっ・・・そんな・・・なんやドキドキする・・・」

・早くも露出の開放感を楽しんでいるようだ。

これは、調教のしがいがありそうだなぞ・・・

キャンプ場に逃げついた我々は、全裸散歩で興奮したあかねちゃんを手頃な木に吊るし、開脚に縛りなおした。

「う、これ……めぞ丸見えやん……」

あははっ……むっちゃ恥ずかしいわー！

回でははっかしいといいつつ、なぜか楽しそうなあかねちゃん。

自由にならない緊縛された体を面白がっているようだ



「あかねちゃんは、マゾ奴隷の素質がありそうだね……」

「まぞどれい？ なんや変な名前や……」

「あかねちゃん、これが何かわかるかな〜?」

「……これ、アリのつくしもんやな?」

「でも、ぶちあんのよじもつと大きい……」

極太のデイルドを目の前に置くと、あかねちゃんは興味津々でそれを眺め、股間を擦り付けてきた。



「おおっ……あはは……」

「へんな気分や……んっ……」

我々の視線を気にしてか、初めはオズオズと腰を突き出し、陰唇をちよんちよんと触れさせる程度だったが、徐々に、股間をこすりつけるような動きに変わっていった。

「んっ……びびりする……」

ちょうど股間にあたる位置に、バイブを縛り付けて固定し正座させる。

「胸につけたローターの振動はどうだい？」

「んっ……紐がちよい痛いけど、こっちも震動が伝わってきてえ……」

はあんっ……乳首がピンコ立ちしてまうっ……」

「あかねちゃん、顔をあげて、

こっちを向いて見せて……」

「へへ……んっ……なんや？……」

「かわいいよ、あかねちゃん……」

「ふえっ……あ、あほなこといわんといて……」

ポツ……

思いがけない言葉に赤面するあかねちゃん……

恥ずかしさで言えば、もっとスゴイことしてるんだけどなあ？



「正座したあかねちゃんの前に仁王立ちし、ズボンをおろすと、興味しんしんな様子でペ○スに釘付けの様子……」

「おおっ……おっちゃんの子○チン、ぎんぎんに勃ってるやん……」

痛いほど充血したおっさんち○ぼを、あかねちゃんの顔に近づけ頬に当てる。

「あかねちゃんのそんな姿見てたら、とうぜんこうなっちゃうさ！」

あっ……あかねちゃんの息が……」



「おつきくて、熱くて、ビクンビクンしてる……」

人間じゃなくて……アカンベーみたいや……」

「アカンベー……?」

そ、そうだよ、な、なめてっ……

ご奉仕するんだ、あかねちゃん！」

「えー！。そうゆう意味やなかったんやけど……」

まあええわ……」

ペロっ……ピチャッ……」

「おおっ。こ、この拙い感じがまた、なんとも」

「ぴちやっ……ん……すごい匂い……けど嫌いやないで……」

おっちゃん、大きくしすぎや、先っちょが攻撃できへん……」

「ふああっ。。。な、なにっ。。。振動が強くなつてっ。。。んっ。。。」

リモコンでバイブの振動数を上げると、フェラチオで興奮した

あかねちゃんの体がビクンビクンと震えてだしているのが感じ取れる。

「あかねちゃん。。。口あけてっ。。。飲んでっ！」

しゃあーっ　　パシャパシャ。。。ジヨボボ。。。

「えっ。。。飲むって。。。あっ。。。」

ちん○んから、おしっこがっ。。。」

あかねちゃんの口にめがけて、溜まっていた

尿をぶちまけ、かわいい少女の顔面を不浄の

体液で汚す興奮に酔いしれる。。。

「あっ、あっ。。。あ、熱いっ。。。おしっこ熱いっ。。。」

うち、こんな野っばらで。。。おしっここんでるっ。。。」

うち、おしっこ飲んでイッてまうっ！。。。」

緊縛され、バイブ責めされながら尿を飲み、絶頂を味わうことで、

あかねちゃんはマソ奴隷としての被虐の快感を目覚めさせていった。。。。



「ご、このカツヨも、むっっちゃ恥ずかしんやけどっ……」

「一度イって、すこし冷静になったみたいだね。」

でも、恥ずかしがる姿もかわいいよ……」

足を折り曲げ、股間を突き出すようにして、おま○ことお尻の穴がまる見えになる、恥ずかしいポーズに縛り上げられたあかねちゃん。ピンと立った乳首は、糸で足指にゆわえつけられられているため、ほんのわずかも足を動かすことすらできない。

流石に恥ずかしいようだが、隠すことも抵抗もできず、すべてを陽光にさらしてしまうしかないのだ。

「あっ……おめ○と……おしりのあなに……」

お日さまが当たってるのがわかるで……んくっ……熱い……」

「熱いのは、お日様のせいだけかな……?」

「……んっ……言わんといて……」

う、うち、散々焦らされて、もうガマンが……」



オププッ！

「くはあっ……。ち、ち○ちん……。は、はいつてきたあつ。あ、熱うっ！」

ベンチ上に転がされたあかねちゃんに覆いかぶさり、興奮で膨れ上がったオヤジ○ンポを、○学生オ○コに突き入れた！

散々焦らされ、濡れそぼったあかねちゃんのマン○は、キツキツながらもめると極太チン○を飲み込んでいく。。。

「おおおっ。。。。くっ。。あ。あかねちゃんの。。中。。。

どろどろで、キョツとじまって、熱いよっ。。。」

「へへ。。あ、あたり前や。。んっ。。うちは太陽サンサン。。。

あわわ。。はあんっ。。日野あかねやで。。。」

ズップ、ジュプツ、ズツチュ。。。

卑猥な水音が、遮るものない草原に響き渡る。

キツイ締めつけと青森の興奮で、あつという間に限界が来た。

「だ、出すよっ！ あかねちゃんっっっっっ！」

ドクッ！ドピュウッ！

「え。。へあっ？。。あんっ。。あ、あああつ、

熱いのがっ。。ウチのなかでえっ！。。。

あああつ、あ————っ！熱いのでイッてまっ、いくうっ！」

何度も中出しされて、ぐったりしたあかねちゃんを、

今度はテーブルの上に仰向けにして縛り直した。

「んっ……ふわあっ……？な、なんやねん、

このカッコ……」

われに返ったあかねちゃんが抗議の声をあげる。

「あ、あほ……こ、こないに足をあつびろげるコト
ないやろ……あっ……さっきのが、垂れてまう……」

先ほどさんざん中出しした我々の精液が、ヒクヒクする
割れ目からトロリと垂れてきている。

「あかねちゃんのかわいいオ○ンコ、よく見えるよ。

まだクリトリスは小さめだね……

ちよつと刺激してみようか……」

「ふわあああつ……なつ……なんやこし……
ま、このビリビリ……」

「どうだい、電動マッサージ器の威力はすごいだろう。クリトリスを中心に、強力な振動で刺激を与えると、あかねちゃんの体がビクンビクンと跳ね上がった。テーブルに縛り付けてなかったら危ないところだった。」

「あつ……あつ……へああつ……」

「お、お豆が……変になるねん……」

「こ、こんなの……負けてまう……にあつ……
いく……またイクうっ!!……」

「プシヤああつ……」

「おっと、潮まで噴いちゃって……そんなに良かった」

「はあ、はあつ……す、すごい武器や……
ウチもちよつと欲しいで……」

「いい感じにほぐれたみたいだね、そーら、
また千〇ポを入れちゃうよ。。。」

「あっ。。ま、待ちいや。。そ、そこピンカンなんや。。
。。い、今入れられたら。。。」

いったばかりで、ピクピクと震えているあかねちゃんの
オ〇ンコに、いきり立った〇ンポを再び突き立てる。

「んはああっ。。。。くっ。。お、奥にっ。。
さつきより奥に。。当たったてんねん。。んうっ。。
ええ。。。。きもちええよお。。。」

仰向けた全身に太陽を浴びて、汗と愛液をキラキラと
光らせているあかねちゃんの可愛いさときたらー!

「ああっ、うち、おめ〇してるっ。。。。ふうっ。。。。
お日様の下で、せつくすしてるんやあ。。。」

ドビュッ! ビュクウツツ!!

「ああああっ。。。。またっ。。。。中でえっ!。。。。
ナカでいくうっ!。。。」

こんどはこの、アナルフックをつかってみようか・・・」

「それ、どない使うんや？・・・ええっ・・・お、おしりにっ？」

「大丈夫、先っぽは丸いから痛くないよ・・・っ」と

めぶぶ・・・

「んっ・・・」

「さあ、この木に吊るして・・・」

「あんっ・・・こーもんが引っ張られて

・・・変な感じやで・・・」

縛られた足でバランスをとるのは難しく、
体重がアナルにかかって押し広げらて
いるようだ。

「ふわっ・・・ふああっ・・・

中、揺らしたらあかんっ・・・

お、おしりがあっ！・・・」

未知の刺激に混乱するあかねちゃん・・・



「あかねちゃん、今度は二人同時に相手してね。。。。」
吊るされたあかねちゃんの前に仁王立ちし、ギンギンに勃ったち○ぽを
目の前に突き出すと、あかねちゃんは待ちきれないように口を尖らせて
吸い付いて来た。

「んっ。。ええよ。。ちゅっ。。はむっ。。。。
はあ。。っ。。お、おめ○にも、入れてえな。。。」

一人が後ろにまわり、アナルフックで
吊り上げられたお尻を掴んで、
お○んこに○ンポを突き入れる。
と、同時に、こちらもあかねちゃんの
頭をつかみ、はげしく前後させて
イラマチオを強制する。
ぐぼっ。。ちゅぼっ!。。

「もっと、ヨダしをだしてキ○ンに
絡めるんだっ。。!」

「よおし、そうっ。。その調子っ!」

「んっ。。ちゅぼっ。。。。」

「んっ。。ちゅぼっ。。んーっ!」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」

「んっ……あかねちゃんのおま○こも、最高だっ……」



「アナルフックでお尻もほぐれことだし、次はかん腸、いつてみようか？」

「えーっ……。か、かんちよー？ そ、そんなんされたら……。」

だ、だめやつ、ダメっ！」

さすがにオープンなあかねちゃんも、かん腸には抵抗があるようだ。

しかし、こちらもう引き下がれない。

「まあまあ、やってみると痛みつきになるっついうよ。それに、

おなかをキレイにしないと、アナルセックスができないじやないか。」

「あ、あなる？ そ、そんなん、やらんくてええからっ……。」

あっ……。こんなカツコ……

あっ……。いややつ……。」

いくら口では嫌がっても、

手足をがんじがらめに縛られた状態ではろくな抵抗もできない。

あつというまに、お尻を高く上げられて尻肉を割られ、

かわいらしい蓄を太陽に晒されてしまった。

「ううう……。うちのお尻の穴が……。お日様にまで……。」

めっちゃ見られてるうっ……。」

冷たい牛乳をたっぷり入れた、かん腸器の先端を、固く食い締められた肛門に
ゆっくりほぐすように埋め込んでいく。。。。。

「冷たっ。。。。いやっ。。。。いややあっ。。。。」

本気でいやがるあかねちゃんの声は逆効果で、われわれの嗜虐心をあおじ、
ソクソクとした興奮を引き起こした。

「そおら、さきつちよが入ったよ。。。。これから液を入れるからね。。。」

シリンジをぐっと押し込み、牛乳をあかねちゃんの腸内に送り込む。

「ひっ。。。。っ。。。。冷たあっ！。。。。お、奥っ！。。。。」

は、入ってくるうっ。。。。」

あかねちゃんは、未知の感覚にプルプルとおしりを震わせている。

「かっ。。。。可愛いよ、あかねちゃん。。。。」

もっ。。。。もっ。。。。と悶えて見せて！」

「へっ？。。。。ふああっ。。。。こ、こんなん。。。。かわええって言われても。。。。」

ぐる。。。。

「ふああん！ あっ。。。。お、お腹。。。。やっ。。。。もうあかんっ。。。。」

やめっ。。。。これ以上入れんといてえっ！！」

「もうすごしだからねえ~~~~ そうら、これで、全部入った!」
カッン!

「ひゅうっ!」

シリンジのちよつとした振動にも敏感に反応するあかねちゃん。さすが
冷えた牛乳の効きはめざましく、すでに強い便意に見舞われているようだ。

くるる。。。ころろ。。。

あかねちゃんのお腹から、かわいらしい ぜん動音が聞こえてくる。

かん腸器が抜かれた肛門は再びギュッとすぼまり、全身がかくかく震えて
いるのがわかる。縛られているために、便意に耐えるポーズを取ることがも
できないのだ。

「お、おねがいや。。。と、トイレ。。。」

縄をほどいて、トイレに行かせてえな。。。」

「トイレでなにをするのかなあ。。。」

「あ、あほ。。。そんなきまつてるやん。。。早く。。。くっっ。。。」

「え〜? ちゃんとお願いしてもらわないと、聞くわけにはいかないなあ」

「。。。う、うんち。。。くっ。。。う、ウんちをさせてえなっ!!!」

「よく言えました。ふふふっ かわいいよ、あかねちゃん。」

「ううっ。。。変身してたら、しなくても平気やのにっ。。。。」

ガッツ!

「ひゃあああつ! な、なんやつ!」

足だけ縄を解き、股を大きく開いてあかねちゃんを抱え上げる。

いわゆる赤ちゃんのおしっこポーズだ。

さすがにこのあとの展開に思い至ったのか、あかねちゃんは顔を

これ以上ないほど真っ赤に染め上げた。可愛いなあ。。。

「うああ。。こ、こんなあかんほみたいになかつこ。。

は、はずかしすぎるやつ。。。。くつ。。あ、あかんつ。。。。

お、お腹がつ!。。トイし。。トイしに。。」

ぐるぐる!きゆるるるうつ!

「ここがあかねちゃんのトイしだよ。

さあ、おもいつき

うんちを出して!」

「あ、あほ!こ、こんな野っばらで、こんなカッコで出したら。。。

ぜ、全部見えてしまっやつ!」

「全部見せてよ、あかねちゃんの全部をみたいんだ!」

「あ、あかんっ……。お、おしっこもっ……。
ぶしゅあああっ！」

青空排せつの開放感で、ぼうこうも緩んだようだ。尿道からもう二筋、
黄色い液体のアーチが野原に降り注いだ。

「やあああっ……。とまらへん……。はっ……。恥ずかしい……。
はずかしいのじっ！」

「ほら、しー、あかねちゃん、しー」。――」

「おおっ、みてごらん……。おしっこどうんちで、虹ができてるよ……。」

「いや、いやっ、は、恥ずかしいっ、うち、恥ずかしくて死んでまうっ！」

……。も、もうゆるじてえなっ……。」

びゅっーびゅんっ！」

「あっ……。あああっ……。あーっ」

あかねちゃんの背すじがピンと伸び、

尿と便のさいごのひと絞りがびゅびゅつと飛び出した。

どうやら、排せつしながらイッてしまったようだ……。

これで、露出の快楽が心に刻まれたに違いない。

あかねちゃんの調教は順調に進んでいる……。

「お天道さまにも、あかねちゃんがお腹の中のものをひじ出すところ、
ぜーんぶ見してもらったねー」

「はあっ……。はあんっ……。お、おてんとさま……。」

「こんなんでもうっ……。かんにんや……。」

かん腸ブレイでいったんアクメに達したあかねちゃんを「休みさせ、
いよいよアナル調教にとりかかった。

まずは股を開いてしゃがませ、うしろからむき出しのおしりを観察する。
セピア色のアナルがしつとりと濡れて色付き、ひくひくと物欲じびび
うごめいている。

「んっ……こ、このポーズで、ええのん？」

「お尻の穴、すっかりきれいになったね……くんくんっ」
アナルに顔を近づけると、甘い体臭に混じってほんのり
ミルクの香りが感じられた。

「ひゃあんっ……な、なに匂いかいどんねん……」

「はひゃっ？……い、息が……かかつて……」

「んん？なにかな？ ふう……」

「ひゃああっ……ひあっん……や、やめえやっ……」

「お、おしりが……むずむずするっ」

「それじゃあこれを入れて、あかねちゃんのお尻をもっと

気持ちよくしてみようか……」



極太のアナルパールをとりだし、あかねちゃんのアヌスに、ひとつ、

ひとつと押し込んでいく……

「あかねちゃん、おしりの力めいて……」

「んっ……は、入ってくんねん……へ、へんな感じや……へあっ……ぐりっ……ぐりっ……」

「んくっ……はあっ……くっ……お、おつき……」

ぬぽんっ！

「ふああっ……は、入った……」

「ああ、でもまだまだポールはあるからね……

今度は大玉だから、がんばって……」

「ひぐうっ……ま、また？……お、おあっ……」

「お、おしりの穴……広がってまう……むり……もう無理や……」

「大丈夫、まだまだ入るよっ……それぐりぐり……」

「ひあっ……ひゃああんっ……む、無茶せんといてえな……ひっ……」

ぬりゅん！

「ほーら、また一つ入った……」

「ううう……も、もう堪忍や……」



「はあ、はああつ……」

何度も泣き叫けられたものの、あかねちゃんのお尻に、ついにすべての
アナルパールが収められた。

今は紐だけが、ようやくすぼまることを許されたアヌスから垂れ下がって、
ぶらぶらと揺れている。



「よくがんばったね、あかねちゃん、どんな気分……」

「うああ……おなか……大きくなった……」

んっ……えらい溜まってる感じやっ……

はあっ……はあっ……おなか中が

……ゴロゴロしてる……な、なんとかしてえな……」

さすがに○学生にはキツイサイズだったかな？

「んっ……くうっ……。だ。だめや……。い。いきんでも出えへん……。も、もうええやろ……。抜いてえやっ！」

あかねちゃんは自力でペールをひり出そうと、必死に頑張ったようだ。

が、玉が半分出たところで止まってしまっており、括約筋がミキミキに広がっているところをばっちり観察することができた……。

「ようし、それじゃおしりの力をめいて……。それっ！」

ぐぼんっ！

「ひうっっ……。ああんっ……。」



「気持ちいいかい……。大きなのがひり出せて、

すつきりするだろう……。ここからは一気に抜くよっ……。。」

「ええっ……。ちよ、ちよい待ちいやっ……。」

「そんな、いつぺんにやなんて……！」

「あっ……。やめ……。あかんっ……。ひうっ！」

勢いを付けて紐をひっぱると、軽い抵抗を伴って、

次々と玉が抜けていく！……。

くぼんっ……。くぼくぼくぼんっ！！

「へあああああっ！……。お、おひりいっ……。い。イウっ……。

おひりでいきゅうううっ！！……。」



「アナルでいくことを覚えた
あかねちゃんには、今度は

「穴の快感を覚えてもらうよ……」

「はあっ……はあっ……？ ふ、ふたあな……？」

アナル責めの余韻が冷めないあかねちゃんを、我々は手早く拘束具に固定した。

「特性のゴム製拘束具だよ。痛いところがあったら言ってね……」

「んっ……平気やけど……これからどないすんねん？」

さあ、次の仕掛けだ。木々のあいだにロープをはり渡し、あかねちゃんを
我々の頭上に達するまで、一気に吊り上げる！

「ひゃああっ……た、高いっ……中、中れる……こ、これ、

めっちゃあぶないでえっ……それに、と、遠くからも、

うちの体……おめ○もおしりも、丸見えやないかあっ！」

「あかねちゃん、さあこれから、君のお○んこと、アナルを、たっぷりとほぐしてやるぞう！」

バイブ一式を使い、手分けして

あかねちゃんの二つの穴を

ぐじぐじほじるプレイを開始する。

「えっ……ま、まさか同時に……やあっ！……」

うちのあそびやおしりは……オモチャやないんやで……」

「ふふ……女の子のすべての肉穴は、男にイタズラされるためにあるんだよ」

「美少女の穴はどれも最高のおもちやだよ！いくら遊んでも遊び足りないね！」

ジューッ！ジューポッ！ズツズツ！

「ふおおっ、しゅ、しゅ……これ、すごいっくるねんっ……」

な、中でぶつかってっ……ふああんっ！」



完全にほぐれてきた少女の肉穴を、極太バイブとアナルバイブを激しくピストンさせてほじくり返す。宙づりの不安定さのせいで、予期しないところへ当たるため、「突き」突きにあかねちゃんは翻弄されてしまっているようだ。



「む、むひゃ・・・せんといてえ・・・」

「あ、おつきいっ・・・」

「・・・し、振動があつ・・・」

「あんっ・・・ああん！」

「いくら恥ずかしい声を上げてても大丈夫だよっ！」

「ここには俺たちしかないからっ・・・」

「あーっ！ああんっ・・・あひらっ・・・うへっ・・・」

「いっくっくっくっくっ!!」

「プシヤっ！ プシヤアアアッ!! ビクっ・・・ビクンッ!!」

愛液が股間から吹き出した。拘束された肢体を精一杯振り返らせ、大声で泣き叫びながら、あかねちゃんは空中ニ穴アクメをキメたのだった・・・

「さあ、これで仕上げだ。しばらくそうしているんだ。」

散々道具で突き上げ、何度もイかせたことにより、愛液まみれでパツクリ開きっぱなしになってしまったアナルとヴァギナ。二つの穴にフックをかけて、糸で引っ張り、閉じないようにさらに開いて固定した。

「あっ……おめこも……おしりのあなも

広がって……風が当たってきもちええ……」

「ふふ……あかねちゃん、穴の奥まで見えて、えろかわいいよ……」

「んっ……そないな……ふわあっ……」

「あ、そうだ……言い忘れてたけど……ここ、ときどき地元の子供が

あそんでるんだよね！」

「えっ……ええっ？」

「せつきのイキ声、大きかったからなあ
なにごとかと思っただけに見に来るかも」

「えっ……ちよっ……冗談やろ……あっ……ま、まってえっ……」

あかねちゃんを空中に放置し、その場を離れるふりをしてこっそり観察する。

「くっ……くっ……くっ……い、いまこないなカッコ、見られたら……」

あ、あかんっ……ドキドキが収まらへんようっ……」

「は、早く……早く帰ってきてえなっ……は、早くうっ!……」

空中で悶えるあかねちゃんを観察すること1時間……ようやく解放したとき、あかねちゃんは安堵のあまり泣き出してしまったのだった。

持参した木馬を森の中に設置し、あかねちゃんをその上にのせてみた。後ろ手に縛り上げられているため、股の力だけで必死に体重を支えるしかない。しかし、それも

所詮無駄な努力。○学生の未成熟な割れ目に、
木馬の鋭角がどんどん食い込んでいく。。。

「あたたた、なんやこれっ？
へんなのに乗せんといてえっ！」

「三角木馬っていうんだよ、昔、拷問につかわれていた道具なんだ」

「ぶ、ゴモソッ？。。。。く、食い込むっ？。。。。あたたた。。。。」

し、しゃれたならへんぞ？ お、おろしてえなっ！」

「。。。。おろしてほいけれええ」

あかねちゃんの秘密をしゃべってもらおう！」

ぞきっ。。。

「ひ、秘密って。。。。な、なんや、なんにもあらへんよう！」

「ふーん、そんなこと言うんだあ。。」

ヒミツというところに妙な反応をしたあかねちゃん。これを口実にもっと責めてみようかな。。

「あっ、あーっ！、揺らしたら。。」

もっと〇めこに食い込むやん。だめっ。。」

おおっ。強気な子をいじめるのは楽しいなあ。ぞくぞくする。。

「どうっ、いじめられて」

ドキドキ感じてこならっ」

「そ、そんなわけ。んっ。ああ。。」

び、敏感なトコロ。。」

刺激が。。」

「へえー敏感なところってどこか、なあ。。」

ユツサユツサ。。」

「ひいっ。や、やめえっ。あ、あかんっ。。」

ま、また漏らしてまう。だめっ。やああっ！」

プシヤァー。。」

あかねちゃんは木馬による股間責めに耐え切れず、とうとうお漏らしをしてみました。木馬の表面を、尿が湯気をたてて滴り落ちてゆく。。

「あっ。や、やめてっ。。」



「こ、こないなデカアツも、わざわざ持ってきたのん?」

あかねちゃんの縄をとき、代わりに十字架に縛り付けてハリツケにすると、もつともな疑問を尋ねられた。

「いや、これは取り壊した家の柱だよ。。。この形、ハリツケに使えるな、と目をつけていたんだ。」

「囚われのヒロインと言えば、ハリツケだからなあ。。。」「

「ハリツケは男のロマンなんだよ! あかねちゃん」

「ふ、ふ。。。ん?。そ、そうなんや。。。」「



（たしかに、アカンベーにも、何度かこないなふうに縛り付けられたなあ。。。）

（あの時もピンチやったけど。。。これから、何されるんやろう。。。）

「さて、あかねちゃんには、ある言葉をその身に刻み込んでもらうよ。」「

「な。。。なんや。。。ちよつと怖いで。。。おっちゃん。。。」「

準備しておいた筆を取り出し、あかねちゃんの下腹部に、丁寧に文字を書き入れていく。

「んっ……。こ、こぼれやん……。な、なに書いてんのん？」

「難しい漢字やんか。」

「そうか、○学生にはまだ難しいかな？ これはメスどれい、と読むんだよ」

「め、めすどれい……。なんや、よーわからんけど、

なーんとなくいやらしい響きやなあ……。」



「僕たちとエッチなことをして楽しませてくれる、可愛い女の子って意味は、あかねちゃんにぴったりだよな！？」

「……。でも、墨で書いただけやったら、すぐに消えてしまうぞ？」

「それは、これからの仕掛けをごろうじろっ……。てね。。。」

カラカラカラ。。。

「あっ。。。。あ、足がっ。。。。やんっ。。。。」

滑車につながったロープを両方から引つ張り、あかねちゃんの両足を大きく広げながら、肩の高さまで吊り上げる。

「ま、また宙ぶりやん。。。。それも。。。。ご、こんなに手足広げて。。。。さ、さっさきより、もっとなんぞかしいカツヨやで。。。。」

十字架はそれなりに高さがあり、ちようど我々の目の高さに、

全開であっぴろげられたあかねちゃんの股間が持ち上げられた。性器とアナル、そして「牝奴隷」の文字が目にとびこんで来る。すごい絵ツラだ。。。。

牝奴隷

「あっ。。。。ご、こんな明るいトコで。。。。あ、あそこ。。。。み、見んといて。。。。やあっ。。。。」

あかねちゃんは十字架の上で何とか秘部を隠そうと身をよじるが、ピンと張られたロープはそのような余地を許さない。

「んっ。。。。暑い。。。。ご、日光が。。。。おっちゃんらの視線も。。。。」

「そう、そのまま全身、おっぱいも恥丘もおしりも、小麦色に日焼けしてもらおうよ、あかねちゃん。。。。」

「ひ、日焼け。。。なんでそないな。。。あつ!。。。。。」

「そうさ、気づいたかい。この文字の使い方がね。。。。」

「やあつ。。。そ、そんなされたら。。。すぐに消えないねんで。。。。」

「お風呂やプール、どないすんねん!」

「だからやるんじゃないか。。。ふふ。。。大丈夫、一生消えない

イシズミじゃないんだから。。。。」

「手足を開いてフリツケにしてるから、スミズミまでよく焼けるよ。。。。」

「さあ、これを飲んで。。。。」

「長丁場になるから、水分補給しっかりしとかないとね。。。。」

「ん。。。しゃあないなあ。。。どうせ、何言っても

ほごいてくれるのやる。。。付き合ったる。。。。」

「ん。。。ちゆうつ。。。こくつ。。。よう冷えとるポカリやな。。。。」



「はあ。。。はあつ。。。んっ。。。な、なんや。。。おなかが張って。。。ああつ。。。さ、さっきのポカリ。。。まさか。。。」

「ご名答。さっきのスポーツドリンクには、利尿剤が混ぜてあったのせ！」
「ふああつ。。。あ、あほ。。。またオシッコしたなつたやないかあつ。。。」

「ほーら尿道くじへん。。。」「んっ。。。やめつ。。。ああつ。。。が、がまんできへん。。。あつ。。。あああーっ！」

シヨロシヨロシヨロ...

「何度も見られてるんだから、今更はずかしがることないだろ。。。」「んっ。。。あほ。。。なんと見られたいうたかて、恥ずかしいもんは恥ずかしいんや。。。しかも、こんなカツコで。。。ウチ、もうお嫁にいけへん。。。んっ。。。」

牝奴隷

「そんなこと言っつて。。。見られて放尿するの、感じてるんだろ？あそこからおツコも垂れてきてるよ。。。」「ぞ、そんな。。。こと、ないで。。。ホンマやでっ！」

それから、2時間あまり……

「ふふ……あかねちゃん……よく全身焼けたみたいだね……」

吊るされた状態で長時間過ごしたため、あかねちゃんの肌は健康的な小麦色に焼けてきていた。

「はあ、はあ……」

「よくがんばったね、あかねちゃん……」

さすがに過酷な調教だったのか、暑さと疲労で息を荒げるあかねちゃん……

牝奴隷

「ま、まあ……うちは、太陽好きやからな……日焼けもどーんとこいや……

でも……水着の跡もなしに、こんなに全身日焼けした人は……

初めてや……おまけに、こんな文字まで入れられてもうて……」

「さあ、墨を落として、あかねちゃんの焼印を確認しようか……」

「や、焼印……フタやウシにするってゆう……?」

「そう、日焼けとはいえ、立派な焼印だよ。焼印は奴隷にもするものなのさ」

「んっ……くっ……こ、こそばいで……おっちゃん……」

あかねちゃんのお腹や恥丘をさりげなく撫でまわしながら墨をふき取ると、小麦色に焼けた下腹部に、白い「牝奴隷」の文字が鮮やかに浮かび上がった。

「成功だ！」

「やったね!! あかねちゃん。焼印、似合ってるよ！」

「これであかねちゃんは、俺たちの牝奴隷だ！」

「はっっ……な、なんや……はずかしいなあ。ウチは奴隷じゃなくて、

本当は伝説の戦士・プリキュアやのに……」

「も、もうええやろ……そろそろ、降ろしてえな……」

「まあまって、記念写真を……」

「えっ……ちよ……こ、こんな姿……記録されたらっ……」

あ、あかんよっ……ほ、ほんまにドレイにされてまうっ……あかんっ！」

「はい……笑って……チーズ！」

「ああっ……あっ……あほ……」

ペシヤッ!





日も落ちてきた、そろそろ帰らないとな・・・

「楽しかったよ、あかねちゃん。調教の証に、

このボンテージ服をプしせし下するよ・・・」

「この服は黒くてカツコよくてええ感じやなあ・・・

おおきに！ 変身するなら、うちはやつぱ

「ビュビュしたのんよじこつちのほうがあええな」

「えっ？ どういうことっ？」

「あー・・・気にせんといて。

オンナには、いろいろあるちゅうことさや・・・」

裏表なく明るいあかねちゃんだが、実はいろいろとビミツをもってるのかな？

女の子とはそういうものなのかもしれない・・・

「さあ、暗くならないうちに帰ろう！。あかね”で晩御飯を食べたいし。」

「ま、また調教させてもらってもいいかな？ あかねちゃん

「へへー、うち、モチモチやな。まあ・・・恥ずかしかったけど・・・

キモチよかったし・・・ええよ・・・」

「これからもよろしくね、あかねちゃん・・・」